**淡谷　悠蔵 （あわや・ゆうぞう）**

**１、プロフィール**

歌人。小説家。評論家。若山牧水の影響で短歌誌「黎明」を創刊。地方文学運動、農民運動を基底とした、小説、評論、戯曲を県内の新聞、雑誌に発表、県文壇をリードした。

＜生没＞

1897（明治30）年３月22日 ～ 1995（平成７）年８月８日

＜代表作＞

 　歌集『焦心』

評論「郷土芸術論」(「黎明」連載）

小説『野の記録』

＜青森との関わり＞

青森町寺町（現青森市）生まれ。新城に帰農、農民運動を興す。昭和47年第14回県文化賞を受賞。

**２、作家解説**

明治30年青森町寺町（現青森市）に、父金蔵、母まつの５男として誕生。36年新町尋常小学校入学。40年浦町高等小学校入学。

大正７年商業を嫌悪して家出、五所川原から連れ戻されるが、百姓への転換が実現。小品「山に住んで」が「文章世界」に入賞（選者加能作次郎）。

８年７月五所川原の「独白」、青森の「樹焔」、鯵ヶ沢の「素描」など三短歌誌を合同し黎明詩社を結成、歌誌「黎明」を創刊。９年の同誌９月号から「郷土芸術論」を６回連載。地方の生活に根ざした主体的芸術を要望する気魄の一篇だった。同誌の短篇「カールの死」「手を拱く」(昭和３年)、黒石の同人誌「胎盤」での「ソローミン考」(大正11年)を発表、力倆を示した。また東奥日報紙上における「芸術の社会化の是非」をめぐる吉田義隆との論争（11年）。これら創作、評論は＜歌への別れ＞を告げるものだった。

「黎明」は昭和３年10月10周年記念号を出し、後十数冊で廃刊するが、体裁上でも短歌から評論・小説に重点が移り、トルストイ色は薄れ、プロレタリア文学待望論が現われ始める。同誌は淡谷と武者小路実篤、賀川豊彦、芥川龍之介、秋田雨雀、鳴海要吉への接点となった。

５年創刊の「座標」は県下総合誌とし不偏不党を宣したが、時代を反映し左右に分離する傾向の中で、淡谷は評論のほかプロ文学「解氷期」で旗幟鮮明、逆の側に太宰治(大藤熊太)がいた。同誌は時代の激動の波に呑まれる結果となった。

自伝小説『野の記録』は17年に書きはじめ、６～11年の間を描く(７部まで)。冒頭の昭和６年の凶作では救済運動、以後中国各地への進出を含んで広域に及ぶ（26年の「薊」(「東奥日報」連載)も素材的には一部重なる)。戦中の思想犯容疑入獄、保護観察処分の具体的描写は歴史的に見ても貴重である｡33年この作の出版の際､「新しき村」の青森支部の縁で、武者小路実篤が序文を書いた。

**３、資料紹介**

〇『野の記録』

図書

1976（昭和51）年２月10日

195mm×133mm

全７巻。７部､72章の大河小説。武者小路実篤の「序」がある第１部は昭和33年に刊行されたが、著作集出版にあたり、初めの３部構成が７部構成に膨らむ。昭和初期から、戦火の中国大陸、太平洋戦争敗戦まで、激動の10年代が背景。自伝的なライフワーク。